

総合活動型日本語教育と私

「教える」から「見つける」へ

古賀和恵

■ はじめに

私は「日本語教育実践研究 (9)」の授業を通して「総合活動型日本語教育とは何か」について考える機会を得、このレポートをまとめた。私たち受講生は、授業の最初にまず「総合活動型日本語教育とは何か」ということについて自分なりの仮説を立て、その後仮説にもとづいて対話者と意見を交わした。この対話と「実践研究」における議論の中で、私はことばを学ぶ教室とは何か、担当者も含めそこに集まったもの同士がどのように関わり合っていくのかということについて深く考えさせられた。そして、教え、教えられる場という縛りから解放された教室とはいかなるものかについて、私なりの答えを見出すことができた。以下に、仮説形成から対話*を経て結論に至るまでのプロセスを記したい。

■ 1. 仮説

日本語学校においていわゆる初級レベルのクラスを担当していた時、せっかく学習者がことばを産出しても、学習者同士が興味を持ってそれに耳を傾け、共有し合うことの難しさを私は感じていた。それは、文型練習のために言う（言われる）ものは、

* 資料として、対話を MD 録音したものの文字化資料および e-mail でやり取りしたものを使用した。

その場限りの単なる思いつきで発せられた内容のないことばであったからである。それでは互いに興味を持って聞くことができないのは当然である。また、せっかく作文を書いても、互いに読んで感想を述べ合うという機会はあまりなく、たいていは担当者が添削し、それを清書して終わりということが多かった。レベルが上がるにつれ、ディスカッションなどの活動も取り入れられたが、そこでは積極的に発言する学習者と、そうではない学習者とで参加の度合いにかなり差が見られた。このように、学習者がせっかく産出したことばを、あるいは産出できたかもしれないことばを教室内で十分交流させることができないことに、私は常々もどかしさを感じていた。しかし、結局はその場限りの活動を繰り返すことに終始してしまっていたのである。

それでは、どのようにすれば学習者のことばを交流させることができるだろうか。学習者は、「話す・書く」という行為によってことばを産出する。そのことばを学習者間で交流させるには、産出されたことばを他の学習者が「聞く・読む」という行為が必要であり、さらにそれが1回きりではなく、互いに理解できるまで何度となく繰り返される必要がある。これらを実現させるためには、「話・聞・書・読」の四技能を総合的に使って、伝えたいことを伝え合う活動が欠かせない。そこでは無意味なことばなど一つもなく、常にお互いが向き合ってことばを交流させることができる。総合活動型日本語教育では、「話す・聞く・書く・読む」ことによって、それぞれが考えていることの発信と受容が繰り返され、その中で学習者は本当に自分が言いたかったことは何か、それを他者に伝えるためにはどのように表現すればいいかということを見つけていく。そこには、学習者の日本語は十分ではない、だから担当者が教えなければならないという、従来の日本語教育で当然視されてきた考え方はない。学習者は、他の学習者との協働によって自らそれらを見つけていくのであり、担当者の役割は、そのための環境を設計し、学習者が「見つける」活動を支援していくことである。その過程で、学習者一人一人の能力や個性が発揮され、学習者同士、さらには学習者と担当者が互いによりよく理解し合うということも可能になるのではないかと思う。ことばを交流させることの意義はそこにある。

以上述べてきたことから、「総合活動型日本語教育」とは、担当者が学習者に一方的に知識を「教える」のではなく、学習者同士がことばを交流させる中で、自分の考えていること、伝えたいことは何か、それらを伝えるためにはどのように表現していけばいいかを、他者との協働によって学習者自身が「見つけていく」場であると考えられる。そして、その「見つける」過程で、学習者は日本語を体得していくと考える。

■ 2. 対話

2.1. 対話相手について

対話をお願いしたSさんとは、昨年、オンデマンド授業「考えるための日本語」を受講した際に知り合った。現在日本語学校で実践に携わっており、日本語教師暦は5年ほどである。「総合」には2000年にボランティアとして参加した経験がある。Sさんを対話相手に選んだのは、学外で実践に携わっている人と「総合」について意見交換したいと考えたからである。

2.2. 教室で学習者がつかむことばとはどのようなものか

まず、授業の始めに作成したレポートにもとづいて、「総合活動型日本語教育」についての私の仮説を説明した。それに対してSさんは、あるプロジェクトで「学習者の心理を配慮した授業設計とは」というテーマで活動している中での経験を話してくれた。そこでは、学習者が抵抗なく作文に取り組めるようにするにはどうすればよいかという視点から実践を考えているそうである。

S：そこでは25課まで勉強したから、それまでの文型を使ってというのではなく、本当に自分が何を書きたいか、というのを一番大切にしたいと思っています。最近ではみんな電子辞書を持っているから、わからないことがあったら調べて書きます。それが文体と合わなかったり、一回読んでも前と後ろとで意味が合わないとかありますよね。それを読んだときに、どういう意味？と聞く。すると、これ

はこういう意味と言う。だったらこれじゃあ読んだ人や聞いた人はわからないと思うよと言う。それで相手がそうかと思ってくれれば直したりもするけど、時々、いやこれがいいと言い張る人もいるので、それを直していいのだらうかとか、どうしていったらいいのかなあと。もちろん、それはその人の言いたいこと。私は日本語を教えている仕事をしているからわかる。でも、それを違う人が読んだときにどう取られるのか。やっぱりそれは直したほうがいいのか、今迷いがあります。

K:「総合」では、訂正はしないですよ。意味が通じなければこれはどういう意味？と聞いていく。正しい日本語とは何か、規範性をどう考えるかなんですけど、私はそこで話している人同士で了解して伝わってるのであれば、それでいいのではないかと考えているんですが。

私は日本語学校で教室を担当していた時、直接訂正しないまでも間違いを直すことについて最初は特に疑問を持っていなかった。しかし、次第に、外に現れた形が正しいかどうかに捕られることによって、その人が何を話しているのか、何が言いたいのかということに私自身、あるいは学習者同士、目を向けることができなくなってしまふと感じるようになった。また、ある表現を使うかどうかについて、担当者の中で必ずしも答えが一致するとは限らないということもしばしば経験した。こうしたことから、日本語における規範性というものを疑問視するようになり、唯一の「正しい」日本語を追い求めるのではなく、そのコミュニティーで伝わることばを学習者が見つけていけばいいのではないかと考えるようになったのである。これに対してSさんは、以前にも作文が嫌い、書きたくないという学習者がどうすれば書くことで自分を表現できるかということを考えてことがあるとのことで、その時のことを話してくれた。

S:その時お互いのことをよく知ってもらおうとか、自分の作文を読んでもらおうとか、そういうことをやりながらすごく書けるようにはなったのですが、あまり文型とか文法の間違いは直さなかったんですね。でも、一番最後の時に、やっぱりそういうことについて習いたかった、教えてほしかった、直してほしかったという意見もあって。日本語を習いに来ている場では、互いのものを読み合っとか、相手のことを知ってとかいうことだけでは足りない。両建てでいかないといけない

のかなあと思いました。両建てでいくためにはどうやったらいいのかなあとというのも、さっきのプロジェクトでやってみたいと思っていることなんです。

K：今毎日やっている「総合」のヨコクラスで、レポートを出し終わった後でいいから、自分たちが書いたレポートを添削してほしいという要望が学習者から出ていました。でも、このクラスでは訂正はやりませんということで終わったのですが、学習者としては間違ったところは直してほしいという気持ちもあるということはあるし、そこをどう考えるかというのは確かにあると思います。自分達が考えていることをやり取りすることに加えて、言語形式の習得をどう考えるかということ。

私はコミュニティーで伝わることばを学習者が見つけていけばいいのではないかと考えるようになったものの、実はSさんと同様の迷いが私の中にもあり、それが上の発言につながったのだと気づいた。これについてはどのように考えればいいのだろうか。ここで、私と同様「実践研究」の受講生であるNさんの対話相手であるMさんのことばを引用したい。Mさんはすでにこの講義を受講しており、「総合」に実習生として参加した経験もある。教室というコミュニティーで伝わることばということについて、MさんはNさんとの対話の中で次のように話している。

M：そのコミュニティーのことばだけでいいっていうんじゃないんだけど、まずはやっぱり、自分が出会った人たちとコミュニケーションがとれるかどうかということから普通始まるって考えて、自分が出会ったそのコミュニティーは、ずっとそのままではないので、そういうものを積み重ねていく経験を個人がいろいろすることになるんですね。そこだけで通じればいいというよりは、まずそこで通じるという経験を積み重ねることが私の中では大きいかなと思うんですけども。

つまり、学習者にとってまず大切なことは、今向き合っている具体的な他者といかにしてコミュニケーションをはかっていくかということであろう。それによって学習者は他者とともにコミュニティーを形成していく。Mさんの言うコミュニティーにおいて「通じるという経験を積み重ねる」というのは、日本語によってコミュニティー

を築いていけたという経験を積み重ねていくことでもあると思った。その過程で学習者が見つんでいくコミュニティで伝わることとは、文脈から切り離された、担当者によって与えられたことばではなく、「通じた／伝わった」、「コミュニティを築いていけた」という実感を伴ったことばである。教室では、担当者が「教えてくれる」知識としてのことばに頼ることなく、そうした実感を伴うことばを学習者自らが見つんでいくことが大切なのではないだろうか。

では、「総合」においてはどうかであったのか、Sさんに聞いてみた。

K:「総合」は両建てではないけれど、それはどういう意味?と周りの人が働きかけをすることでそれを補っていたのでしょうか。

S: そうだと思います。日本語学校である教科書を使って、その教科書のシラバスに基づいて文型やことばを教えているのは、「今は使うことがないかもしれないけれど、それがこれから使う場面に遭遇するかもしれないから、覚えておきましょう」という感じなのかなあって思いました。何かあった時のために、たくさん道具を備えておく感じ。でも、「総合」では、その人がもっている何かもやもしたようなものがあって、それをどのようにしてことばにしていくかをやっているのだと思います。それは、他者からの問いかけが大きな役割を果たしていると思います。そうやって、その人が言いたいことが、だんだんその人自身や、周りの人にも見えていくようになるのではないかって考えました。

Sさんは、学習者は「結局いっぱいいっぱい詰め込んでも、それがいつどういうふうに見えるのかわからなくなったりしてしまうこともよくあった」とも言っていた。与えられたことばをいくら頭の中にストックしても、いざ使おうとした時に実際の場面に合わせてうまく取り出せないということであろう。一方「総合」について上で述べていることは、他者との協働によって自分でも気づかなかった考えを見出すことができるということである。学習者はそれをどのように表現していったのだろうか。

S: 気がついていたら話せるようになっていたのか、書いていたのは、たぶん、クラスメートの中での質問、ボランティア、先生の質問に答えることでわかるようになったことばもあるし、後はこういう時ってどう言ったらいいんですか、とい

う質問もありましたし、そういうことで最終的にはレポートが書けたということにつながるかな。

そこで学習者がつかむことばは、いつかどこかで出会うかもしれないだけかではなく、今まさに目の前にいる具体的な他者に対することばであり、それをつかむためには、他者からの働きかけが必要だということであろう。

これらのことから、「総合」では、担当者もコミュニティーの一員として、学習者の考えていることと、それを表現するためのことば探しをともに行っていくのだと考えた。しかし、Sさんの話の中にあつた、どう言えばいいのかという問いかけに答えることは、「教える」ことになるのだろうか。それについてどう考えればいいのか、この時点では答えを見出せなかった。

2.3. 教室は何をする場か

2.3.a 「形式」を練習する場としての教室

Sさんは「総合」での経験や日本語学校での実践を通して、自分が考えていることを表現できる場は大切だということがだんだんはつきりわかってきたという。なぜそのような場が大切だと思うのか、その理由を聞いてみた。

S: みんなそれぞれ考えていることはあると思うけれども、それを外に出すには、相手がいれば考えがもっとはつきり出せると思うんです。私は、頭の中でこうだと思っけていても、それを人から聞かれてことばで話したり書いたりすると違ってたり、こういうことを自分は考えていたのかと思うことがあるので、話すことによってこういうことが言いたかったの?と言われて、ああそうかなあと。目に見える形というか、自分が考えていたことがわかるようになるのは、一人じゃなくて、相手がいないとできない。

確かに、自分が考えていることは人に話して初めてわかるということがあつた。他者とのインターアクションによって思考が活性化し、自分の考えがはつきりつかめるようになるのである。また、Sさんは「総合」の活動において、「他の人から色々質問

を受けたり、アドバイスをもらって書き直すということで、本当に変わっていくのを目の当たりにした」とも言っていた。何が変わったのかをさらに聞くと、他者からコメントをもらうことで、表面的なことしか書いていなかったのがもっと考えが深まり、レポートも変わっていったということらしい。

K：そうすると、ことばを習うというのは、今までは形を習うということがあったと思うんですね。文型とか文法とか単語の意味とか。それを習うのがことばを習うという感じがあったと思うんですけど。でも、ことばを習うというのは、もっと違うような気がします。そのへんいかがですか。実際の現場のことはちょっと離れて、日本語の教室というのはどんなことをするところだと思われますか。ことばを学ぶことというのは。

S：でもやっぱり、ことばを習いに来ているという場所だから、全然文法とか新しいことばを習えないという場所ではないと思うんですよ。この間も話したように、両建てが必要かなと。ただ、あなたは何を言いたいですか。私はこういうことを言いたいんですということが言える場所でもあっていいかなって。

「両建て」ということは、ことばを習い、それを練習することも必要ということだろう。私は「練習」することに対するSさんの考えを聞いてみたいと思った。

K：言いたいことが言えるためには、両建てでってことですか。練習をする時間と話す時間みたいな。話すことは別個に、文型とか文法を教えるということについてどう考えてらっしゃいますか。文型を練習するということは、切り取ったものを練習することになりますよね。練習だけのためのものを話すということ。そういう練習を積み重ねていくことについてどう思いますか。

S：気持ちが悪いですね。

K：気持ちが悪い？

S：例えば、授業で「受身」を勉強したら、授業中に何か私が聞いたことで、学生が受身を使って答えなければならないんじゃないかと思って、それが受身を使わないような文でも使おうとするんです。教科書にしばられている感じがしています。その人が言いたいことはたくさんあるのに、文型の練習でそれが言えない、またはその文型で「答える」ためには自分のことではない、架空のことを言うことに「気持ちが悪い」と思いました。

K: 練習ということは、本番が別にあるということですよ。そこは嘘というか、バーチャルなものとか。教室の中は練習というのが。そうじゃなくて、教室の中も本番、本当のコミュニケーションする場みたいにはできないものかと思うんですけど。

S: ちょっと離れるかもしれないんですけど、前に学生が授業が終わったあとに来て、話したことがあったんですね。そのときにちょっと時間が長びいてしまって、長くなってごめんねと言ったら、「いえいえこれは練習ですから。先生と話すことは練習になりますから」と言って、ちょっと悲しくて。その人から見たら、日本語を使って話すということは、その人の日本語学習の中では練習という意味もあると思うんですけど、私は自分と話すことは練習と思われているんだと思って、落ち込んだことがあるんです。でも、私はその人と話したいと思って話していたし、その人の練習のためだからなんて全然そのときは思わなかったのね。

K: 学習者も担当者も、教室は練習するところなんだというものすごく強い固定観念があるんだと思うんですね。でも、そうじゃなくて、人と人が会って、出会っていく場にするのが日本語の教室なり、教室というからまた練習する場になってしまうんだけど、そういう空間にしなきゃいけないのかなと思うんですね。

S さんの話を聞いて、教室は文型や文法を習うところであるという非常に強い認識が、担当者にも学習者にもあるのだと改めて思った。そのために、教室は練習の場という捉え方になってしまうのである。したがって、「教える」「教えてもらう」という認識を一度壊してみても、そのうえで改めて教室では何をしていたらよいかを考えてみる必要があるのではないかと思った。

2.3.b. はじめに「内容」ありき

私はここでまた改めてことばを学ぶ場について S さんがどのように考えているかを聞いてみた。

K: 教室というと教え、教えられ、習う、練習する場になりますよね。じゃあ、(理想的な) ことばの空間とすると、そこではどういふことをやっていけばいいと思いますか。

S: さっきの話のように、私もその人と話したいと思うことがあったから話したわ

けれど、相手のことが知りたいとか、相手のことを聞いて思ったことを言いたい場所だと思うんですね。

K: そういう関係を作っていくには、相手の考えていることを聞き合っていくしかないと思うんですけど。ことばの形式が間違ってるのか正しいとかじゃなくて、話す内容、考えていることに興味を持つことで向き合う必要があるのかな。

S: そうですね。だって、ことばの形式が間違っているけど、意味が変わりはない。変わっちゃうこともありますけど、そしたら、それはこういうこと？と聞く。やっぱりはじめに形式じゃなくて、はじめに内容ありきだと思う。その時に動詞の形が違ったりとか、助詞が違ったりとか、そこをついても仕方がないんじゃないかな。でも、やっぱりそれがもしことばの教室だったらそこはやっぱり教えなきゃいけないのかなって思いますね。

Sさんも練習することについては問題視しているところがあり、「はじめに形式」ではなく、「はじめに内容ありき」だと言う。私はSさんの「はじめに内容ありき」ということばに共感した。ここでいう「内容」とは、学習者が考えていること、言いたいことである。それを伝え合おうとする時のことばは、今使いたい、今伝えたいことばであろう。したがって、先に述べた実感を伴うことばをつかむためにも、「内容ありき」である必要がある。しかし一方で、Sさんはことばを「教える」必要もあるのではないかと言う。学習者が考えていること、言いたいことから出発した場合、それを表現するための言語形式を「教える」こととはどのようなことをいうのだろうか。Sさんが先に述べていたように、学習者がどのように表現すればいいかわからず、どう言えばいいのかと聞いてきた時に答えることがそうなのか。「内容ありき」と考えた時に、言語形式を「教える」ということをどのように捉えればいいのか、私はまだはっきりつかめずにいた。

その時に、実践研究の授業の中で実習生のYさんから、学習者が言いたいことを表現するための「最適表現」を一緒に考えることは、「教える」ことではないのではないかという意見が出された。また、「総合」では学習者が言いたいことが何かをまわりが問いかけていくことで、表現するためのスキヤフォルディング／足場かけを

していているのだという話もあった。これらの意見をもらうことによってようやく私は、学習者の言いたいこと＝「内容」から出発しそれを表現していく過程で、学習者にとって今必要な、今欲しいことばが何であるかをともに探し、投げかけることは「教える」ことではないのだと考えることができるようになった。その投げかけをつかむのか、もっと違うものを選択するのは、学習者本人が決めることである。そのように「総合」の教室では、担当者と他の学習者からの足場かけによって、一人ひとりが自分の言いたいことを表現するためのことばを見出していくのである。では、「教える」というのはどういうことか。それは、学習者が今必要としていることばか、今欲しいと思っていることばかということに関係なく、知識として形を提示していくことであると捉えた。

2.3.c 考え、表現する場としての教室

私はSさんの「はじめに内容ありき」ということばにSさんの言語観や教育観が現れていると思い、Sさんが言語教育についてどのように考えているのか聞いてみた。

K：言語教育の目標はコミュニケーション能力の育成とよく言われるけど、今まで単に人と人の中でことばをやり取りできる、会話ができていったことしか考えていませんでしたが、そうではないのではないかと。そのちょっと前の段階の、自分の中で考えてことばを出すところからコミュニケーションを考えなければならぬのではないかと思い始めました。考えて表現して他者に伝える、他者から返ってきたものを聞いてまた考えて表現するというようなことです。

S：言語教育というと新しいことばや文法を教えることだけに目が行きがちなのが、そうではなく、まず、言語を使う場面、人とコミュニケーションすることとはどうということかを考えた上で、ことばがある、ということ学ぶことではないかと、思えてきました。

つまり、最初から言語形式を学ぶのではなく、まず考えていることを伝えたいという気持ちがあって人とやり取りをする。その中でいつの間にかことばが学べるということであった。人と人とのコミュニケーションは、他者に伝えたいという思いから始まるのだと思う。したがって、Sさんが言うように言語教育はそこから考えていく必

要があると私も考えている。形式は後からついてくるということについては「総合」を経験する中で実感したらしく、「総合」では学習者は何を学ぶのかという私の問いに対して、Sさんは次のように答えた。

S: ちょっと違うかもしれませんが、まず、「総合」の授業が終わったときに、レポートを書いた人達はぜったい「達成感」を感じたと思います。なぜかという、いろいろな人から「どうして?」「どうして?」と問われることって、必ずしも本人にとって気持ちのイイモノデハナイと思うからです。自分がどうしてそう思ったかなんて、(私だけかもしれませんが・・・)考えることはあまりないし、それをことばにすることってあまりないかと思います(もやもやの中にあるから)。それを他者から問ひ掛けられて、自分で振り返るのは辛いこともあると思います。答えがすぐ出るものでもないし、例え、答えが出ても、自分は本当にそう思ったのかと何度も何度も自分に問うからです。

そのようなことを通して、学習者は「自分が考えていることをことばにすることの難しさ」を感じ、そして、自分の考えていることを表すには相手が必要であることをマナブのではないか・・・と思います。でも、これを「学ぶ」といいいいのか、自信がありません。そこでは、日本語は「副産物」のようなものかという気がしてきました。総合で最初から「日本語を勉強しよう」ではなくて、「自分が何を考えているか考えているうちに、日本語も上手になる」のかな・・・

つまり、「総合」では他者とのインターアクションによって考えていることをつかみ、それを表現していくプロセスの中で、いつの間にかことばを獲得していくことであろう。Sさんは、考え抜いたことによって、学習者は「達成感」を感じていたようとも言っている。しかし同時に、考えていることは何かと繰り返し問われ、それをことばで伝えていくのは辛く、苦しいことでもあるとも言っている。それを「総合」の教室でやるのはなぜだろうか。

S: 苦しくても、苦しみたくなかったらおしゃべりすればいいかな。やっぱり自分が考えていることを相手にも伝えたいという気持ちがあって、それがなかなか伝わらないとそこでまた考えて、また出して。なぜかというそれは自分がこう思った。じゃ、その話を聞いた相手の人はどう思ったかということをも自分も知り

たい。一つにはやっぱり相手にも考えてもらいたいという気持ちがあると思うんですね。

K：自分の言った意見に対して、それについてどう思うかというリアクションがほしいということですか。

S：その時には、おしゃべりじゃなくて、相手も考えて。だからやっぱりその場は私も考えて相手にも考えてもらいたい。

K：それはおしゃべりでは達成されないんですかね。リアクションをもらうというのは。

S：そう思います。

K：おしゃべりの中身と考えると言った中身の違いだと思いますか。質的な違いみたいな。

S：うん。

K：それか一生懸命考えて出したことなんだから、それを受け止めて、相手の人がまたそれを考えて出してほしいという、真剣なやり取りをしたいということ、そういう違いでしょうか。

S：うん。例えば今話している時に、考えることは大切だからおしゃべりと違うんですよって終わっちゃったら、えー、そんなもんですかって私は思うし、でもやっぱりそう言うからには何か理由があって、考えた過程があって、そうなったんだって言いたいんですね。その違いかな。おわかりになりますか？

K：その人が考えた、自分かな。プロセスもわかってほしいということですか。

S：そうですね。私はこう考えてこう考えました。どうですか？

K：一生懸命考えたプロセスがあるから、ちゃんと考えてリアクションしてほしい。

S：うんうん。

自分のことを相手に伝えたい、そしてそれに対して何らかのリアクションが欲しいというのは、他者とことばを交わすときの基本的な欲求であろう。その時におしゃべりではなく、相手が考えたプロセスを理解しながら自分も考えてリアクションをするということ。「総合」ではそれが求められるということだ。それは、クラスの中やレポートを書くときだけでなく、自分が選んだ人と対話をするときも同じであろう。「総合」の授業では、対話をする時には知りたい、聞きたいという気持ちでインタビューをす

るのではなく、自分の考えを相手にぶつけ、相手からも意見をもらうことが大切だという説明がなされる。しかし、実際自分が対話をやってみて、それがいかに難しいかを痛感した。私はSさんとの対話を振り返ってみて、話を深めることが十分できていなかったことに気づいた。Sさんは「私も考えて相手にも考えてもらいたい」と言っていたが、私はSさんとの対話において、自分が考えるということを十分行っていなかったのである。考えていたのはSさんだけで、私は単にインタビューをしていたに過ぎない。Sさんの考えを受けてそれをもとに思考をめぐらせ、新たに考えたことをSさんにぶつけてみるということをせずに、質問することに終始していたのである。

「総合」では、対話に先立って書く動機文を何度も何度も検討する。このレポートにおいても仮説を何度も検討した。それによって、そこで一番言いたいことは何かを明確にし、その時点での自分の立場づくりをするのである。対話では相手の考えを受け止め、自分の中でまた考えて投げ返していく必要があり、その時まさに動機や仮説を検討する時と同じように、その瞬間瞬間立場づくりをしていく必要があるのではないかと思う。そうした瞬間瞬間の立場づくりを経ていくことは、最終的に当初考えていたこととは違う新たな立場を見出すことにつながっていく。もちろん、それは対話だけではなく、クラス内でのディスカッションについても同じことが言えよう。そして、考え、表現しながら新たな立場を見出していくためには、Sさんが言うように考えをぶつけ、それに対してさらに考え、リアクションをしてくれる「相手が必要」ということであろう。自分一人では新たな考えや立場にたどりつくことは難しい。そこに他者が関わってくれることで自分にも気がつかなかったものを見出すことができるのである。

私は仮説において、伝えたいことを伝え合うことでことばを交流させることができるということを書いたが、そこでは単にことばがやり取りされることだけしか考えていなかった。それではおしゃべりでもいいということになってしまう。しかし、「総合」では相手が考えたことに対して自分も考えるということをしながら瞬間瞬間の立場づくりをしていくという、思考のやり取りが重要なのである。Sさんは、まさに他

者とのインターアクションにおいて互いに考えをぶつけ合うことの重要性を語っていたにもかかわらず、私はそれに気づくことができなかった。その結果、Sさんに何も伝えられず、また自分自身が新たな立場を見出すこともできないまま対話を終えてしまったのである。こうした苦い経験によって、私は伝えたいことを伝え合うためには、他者とともに考え、表現していくことがいかに大切であるかを実感した。とはいえ、Sさんとの対話は、その後自分の中で考えを深めていくためのきっかけとなった。Sさんのことばの意味を自分の問題意識と照らし合わせながら繰り返し考えることによって、最終的には自分なりの立場を見出していくことができたのである。今回は対話を通して考えたことをレポートにまとめるという目的があったからということもあるが、対話とはその場限りで終わるものではなく、そこでのやり取りが心の中に蓄積されていくことによって、人になんらかの影響をもたらすものなのではないか、あるいはそのようなものこそが対話であると言えるのではないかと思った。

■ 3. 結論

「総合活動型日本語教育とは何か」を考える中でいつも私の中にあったのは、「言語形式」をどう考えるかという問題であった。私は、練習することに終始し、本当のことではない中身の無いことばがやり取りされる教室ではなく、伝えたいことを伝え合う、生きたことばがやり取りされる教室を目指したいという思いがあって、そのためには担当者と学習者の「教え」「教えられる」という固定化された関係を崩す必要があると考えた。一方、Sさんは、「内容ありき」ではあっても、ことばの教室である以上「形式」を「教える」ことも必要ではないかと言っていた。

私はこれまで学習者が考えている／言いたい「内容」か言語の「形式」かという点から考えてきたが、実践研究の授業の中で、問題は「内容主義（重視）」か「形式主義」かということではないかという意見をもらった。いうまでもなく、「内容」を表現するためには「形式」が必要である。私は「内容」か「形式」かという問題と「内容主義」

か「形式主義」かという問題を混同することによって、「内容」と「形式」を対立するもののように考えてしまっていたのである。それに対してSさんは、「形式」も必要なのではないかと繰り返し話していたのではないだろうか。

それでは「形式主義」とは何か。私はSさんとの対話や実践研究での議論、実習クラスの観察を通して、学習者にとって必要なこととは、文脈から切り離された、担当者によって与えられることばではなく、「通じた／伝わった」、「コミュニティーを築いていけた」という実感を伴うことばであると考えた。「形式主義」とは、そうした実感を伴うことばではなく、文脈から切り離された知識としての「言語形式」を、学習者にとって今必要かどうかに関係なく与えていこうという立場であると考えた。そこでは学習者が学ぶべき「形式」を知っているのは担当者であり、学習者はそれを学ぶということになる。たとえ学習者が考えて「形式」を使う活動を行ったとしても、それはあくまでも「形式」のためであり、「内容」は問題にされない。したがって、「形式主義」にのっとった教室では、担当者が言語形式を「教え」、学習者がそれを「練習する」場になってしまう。

一方、「内容主義」は、学習者が考えていること、言いたいことは何かということを中心に据え、それと向き合っていこうとするものであり、「総合」はまさにそれを行っている活動である。それぞれの学習者が考えていることは、学習者本人にしかわからない。しかも、それは本人にとっても最初は「もやもや」しているものであり、本当に言いたいことが何であるかに気がついていないということもある。したがって、学習者の考えている「内容」を活動の中心にもってきた場合、担当者の役割とは、「教える」ことではなく、一人ひとりが考えていることを学習者とともに「見つけていく」ことにならざるを得ない。そして、「内容」を表現するためには「形式」が必要であるということから考えると、一人ひとりが考えていることを見つけ、表現していくことは、それを表現することばをも他者からの足場かけによって「見つけていく」ということになる。Sさんは、日本語は「副産物」のようなものと表現していたが、それは「内容」を中心に据えることによって、「内容」と「形式」は対立するのではなく、「内容」

に伴っておのずと「形式」もついてくるということであろう。しかもそこで「見つける」こととは、前述のように「わかった、伝わった」という実感を伴ったものである。私は、仮説で「日本語を体得する」ということを書いたが、それがどういうことなのかは深く考えていなかった。しかし、Sさんとの対話や実践研究での議論を通じて、この実感を伴った言語体験を積み重ね、考えていることをことばによってつかむことが「日本語を体得する」ということであると考えるようになった。

これまで述べたことから「総合活動型日本語教育」についても一度考えてみると、仮説形成時点ではまったく思いもしなかったが、「教える」から「見つける」へという教室活動の転換を考えることは、「形式主義」と「内容主義」について考えることにつながった。「形式主義」においては、担当者が「言語形式」を「教える」ことが活動の中心になる。「内容主義」では、学習者が考えていることを中心に置くことによって、学習者の考えていることや、それをどのようにことばにしていけばいいかを「見つけていく」ことになり、「総合」ではそれが行われているのである。また、仮説では学習者の活動にしか目を向けていなかったが、担当者自身もその場その場で学習者とともにそれらを「見つけていく」のであると考えるようになった。

さらに、「総合」で大切なことは、単にことばを交わすのではなく、思考をめぐらせたことばをやり取りすることである。「わたし」も考え、「あなた」も考えながらともに思考と表現を練り上げていくことによって、それまで気づけなかった新しい考えや立場にたどり着くことができる。私はやはり仮説において、「総合」は四技能を総合的に使う活動であると単純に捉えていたが、それだけではなく、思考を含め、様々な能力を使う、まさに人間の総合的な活動であると思った。

以上のことから私にとって「総合活動型日本語教育」とは、学習者が考えていることを活動の中心にもってくる「内容主義」の立場にたつものであり、担当者も含めたコミュニティー参加者の協働で学習者が考えていること、言いたいことを「見つけ」、それを表現するためのことばを探していく場である。そこで重要なのは、思考をめぐ

らせたことばをやり取りすることであり、学習者はこうした活動を通じて、日本語を使って他者との関係を取り結べたということを実感することができると思う。

■ 4. おわりに

私にとってこの「実践研究」の授業は、他の実習生との議論や実習生それぞれの対話内容をとおして、「総合活動型日本語教育」がめざすものとは何か、なぜそれをめざすのか、そのためにはどのような支援を行っていけばよいのかなど、様々な角度から重層的に「総合」を考えることができた場であった。今回、教室とは何をする場かという捉え直しを行っていく中で、対話や授業をとおして「内容主義」ということについて考えさせられたが、「総合」において求められる「内容」とは何かということについてさらに掘り下げ、それはこれまで日本語教育において考えられてきた「内容」とどのように違うのか、どのような支援によって引き出すことができるのかなど、「実践研究」で得たものをもとにさらに考えていく必要がある。また、私はこの授業によって、対話についても様々に考えさせられた。今期「実践研究」の授業をはじめ、いくつかの対話を行ったが、毎回対話の難しさを実感した。話がなかなか深められず、表面的な話を繰り返してしまい、対話が対話にならないことが多かった。そうした経験は、逆に対話の重要性に気づききっかけともなった。ことばを学ぶことと対話との関係についても今後さらに考えていきたいと思う。

最後に、2度にわたる対話と、メールでのやり取りに応じてくださったSさんに心より感謝申し上げたい。実践の中から生まれた貴重なご意見を聞く機会に恵まれ、自分なりに考えを深めていくことができた。また、制約の多い現場にあつてなお、理念にもとづいた実践を試みる姿に大いに勇気付けられた。また、夜遅くまで熱い議論を繰り広げた実習生の皆さんにも感謝申し上げます。